

第2回岐阜県教育ビジョン検討委員会 議事要旨

日 時	平成25年3月18日(月) 14:00~16:00
場 所	県議会西棟 第1会議室
出席者	<委員> 14名 林正子委員(委員長)、池谷尚剛委員(副委員長)、今村亮委員、 衛紀生委員、小塩貞子委員、加藤直樹委員、金森さちこ委員、 川上紳一委員、佐久間朋子委員、塩谷博英委員、鹿野孝紀委員、 下屋浩実委員、柘植良雄委員、友田靖雄委員 <県教育委員会> 18名 教育長、教育次長、義務教育総括監、総合教育センター長など

会議の概要

- 1 開会
- 2 あいさつ
- 3 協議事項
 - 第2次教育ビジョンの基本理念について
 - 第2次教育ビジョンの重点目標と施策体系について
- 4 閉会

意見の要旨

【加藤委員】

- 教育施策を推進する上で、5年間で方向性を変更することはむずかしく、現行ビジョンの基本的な部分を継承することには賛同する。

【柘植委員】

- 特別支援学校に関しては、県の施策として充実してきているが、義務教育においては、特別支援学級及び通常学級にも障がいのある児童生徒が多数存在しており、その子どもたちに専門的に指導する教員が極めて少ない状況にある。また、専門的な免許を所有していない教員が指導にあたっていることもあり、特別支援教育に関する専門家の育成が必要である。
- 現在、義務教育における特別支援学級の教員採用枠が設けられていないため、義務教育には採用の段階から特別支援教育の専門家が少ない状況になっており、改善が必要ではないか。

【池谷副委員長】

- 特別支援教育に関しては、免許や採用等に課題があるが、今後、特別支援教育の充実を進めていく必要がある。国の制度のみに依存して、特別支援教育の充実を進めていくことはかなり厳しく、この会の議論を通して、学校現場を支援していく県独自の施策を打ち出していくことが必要だと思う。

【金森委員】

- 特別支援学校や特別支援学級の子どもたちは、地域との関わりが非常に少なく、同じ学校の保護者もその情報を共有していない状況であり、地域でそのような子どもたちをサポートする体制が整っていない。モデル校だけではなく、岐阜県全域で障がいのある子どもたちを受け入れる体制の構築が必要である。
- 現在、小学4年生と6年生で福祉に関することを学んでいるが、今後、福祉の授業をいかに充実させていくかを考える必要がある。また、日常生活の中でバリアフリーに対する感性を養う教育も求められてくるのではないかな。
- 小学校高学年で福祉のことを学ぶのではなく、幼児期など就学前から体系立てた福祉教育をすることで心の教育にもつながっていくと思う。

【川上委員】

- 現在の日本社会において、少子高齢化や資源の少ない中でどうやっていくのか等の問題を抱えながら、今後どのような子どもたちを育てていくのが、確かな学力の育成にも結びつくと思う。
- 理科の担当として、小・中学校においては、子どもたちに本物を見せることや体験させることで楽しみを与え、そこからものごとを追及させていくことが大切である。全国学力・学習状況調査において、本県では「実験・観察を進んで行っている」と回答した理科教員が、全国平均より約30ポイント上回っていたことが、本県の理科教育にとっては非常に素晴らしいことであり、それを継続していく必要がある。
- 高校においては、キャリア教育なども含めながら確かな学力の育成を行う必要がある。単に、いい大学に入るための学力では、大学に入学後、何を学べば良いのかわからなくなってしまう。

【衛委員】

- 詰め込まれた知識では、社会的な対応力がない。確かな学力とは、知力より人間力だと考える。探究心や好奇心などは、ネガティブな気持ちからは生まれにくい。自己肯定力を持たせることで、自らが学ぼうとする気持ちや何かをクリエイティブしようとする気持ちが生まれてくる。学校の成績が良いことが、確かな学力にはつながらない。
- 特別支援学校や特別支援学級に通っている子どもたちの可能性を引き出す機会が作れないだろうか。共生教育をさらに推進していくことも必要である。
- 相手を思いやり、気遣う気持ちを育むことが福祉教育につながる。知識として福祉を学ぶのではなく、人間の根底の部分から学力を考えることが、福祉教育や人間力の育成にもつながる。

【鹿野委員】

- 日本の学校教育は、「知・徳・体」を一体として教育を行うことに主眼を置いている。小・中学校では地域ごとに、高校では普通科や専門学科などにより学校が組織されており、各段階でどのような教育に力点を置くかが重要である。

【柘植委員】

- 個性は集団の中で認められて初めて伸ばすことができる。集団なくして個性は育たない。以前は、「個性＝わがまま」という間違った捉え方をしていた時期もあったが、学習集団を育成することが子どもたちの個性を伸ばすことにもつながると思う。

【佐久間委員】

- 現行ビジョンでは7つあった重点目標が、5つに絞られたということで、非常にスッキリしたように思う。
- 現行ビジョンでは、特別支援教育が「教育環境」の中に整理されており、建物を作るというイメージが先行したが、今回は「確かな学力の育成と多様なニーズに対応した教育の推進」の中に特別支援教育が入っており、ソフト面を重視した姿勢が表れている。
- いろいろな体験を通して子どもたちが充実感を持つことで、自分の良さや可能性に気付くことができ、周りの人に認められることで自己肯定感が芽生えると思う。

【川上委員】

- 環境教育は、自然の問題・人々の生活の問題・社会の問題をセットにして「持続可能な地域づくりを行うこと」に視点を置きながら取り組んでいる。今後、地域の良さ・岐阜の良さを発信できるような教育を進めていく必要がある。

【衛委員】

- 集団の中で受け入れられ、共感されることで子どもたちは巣立つことができる。集団・仲間の中で個性や良さが育まれるということが大前提として考え、学校や社会において、いかに多様な集団を作っていくかが重要である。
- 学校は成績によって輪切りにされている競争社会になっており、共感し合うことができない。学校は競争の場でもあるが、共生の場でもある。昔は、学校の成績だけでなく、運動会で活躍する、文化祭で活躍する、委員会活動で活躍するなど、多様な価値が認められていた。もう一度、子どもたちが共感されて伸びていく環境を作る必要がある。

【林委員長】

- 一律の評価ではなく、多様な指標をもった上で、子どもたちの価値を認めることが重要である。

【小塩委員】

- 現在、教員の疲弊が進んでいる。教員が疲弊している中で、学校の外に協力を求める必要があるのではないか。

【加藤委員】

- 教員だけでやり切れることには限界があり、支援員など教員以外の方々と協働した教育体制の構築が必要ではないか。
- 高校の在り方専門委員会においても、自立や自己肯定感の育成など、この会と同じ趣旨の議論がされたが、どのようなプロセスでこのことを子どもたちに身に付けさせていくのかが今後の課題ではないか。

【塩谷委員】

- 家庭の中にどのように学校教育が入っていけるのかがポイントではないか。幼少の頃から、親に認められてきた子どもたちは、勉強や運動が出来る・出来ないに関わらず、自己を肯定できる素養がある。逆に、勉強や運動が出来ないと子どもを叱ってしまうことがあるが、このようなことを言われ続けてきた子どもたちは、学校で多少認められたとしても自己肯定し難い状況にある。こういったことを、いかに家庭に浸透させていくかが重要なことであると思う。